

2013年12月24日

第19号

自然と文化だより

発行:NPOシニア自然大学校

自然と文化科

*****目次*****

- P1 新任幹事のコーナー
社会貢献事業を振り返って
- P2 今号の TOPICS
「冬籠り?夏籠り?」
- P3 仲間たちの近況報告 (1)
1班 星のふる里
2班 今年も冬をむかえ
- P4 仲間たちの近況報告 (2)
3班 熊野古道
4班 富士山大噴火の予想
- P5 リレー随筆
「今の日本人にがっかり」
年末特集 「おせち料理」(1)
(岡山、大阪)
- P6 俳句・川柳・絵画サロン
年末特集 「おせち料理」(2)
(北の国)
2013冬俳句

◇自然と文化だより

19号に投稿頂いた皆様、有難うございました。師走の街が忙しく動き回っています。スケジュールとにらめっこの日々が続きます。

お正月特集として日本各地のお雑煮を3人の方にご紹介頂きました。一足先にお正月気分を味わって下さい。

それでは2014年、いい年でありますように。

N.Take



新任幹事のコーナー 社会貢献事業を振り返って

社会貢献専任幹事 長野 馨

現役時にとある財団で、小学生対象の自然観察会の事務局を担当したことがあり、この時に子供と接する‘やりがい’と‘楽しさ’を知り、観察リーダーとして係りたいとの思いより、リタイヤと同時に当大学校を受講しました。

本科、高等科を経て、自然と文化科で本年度より専任幹事として担当している社会貢献事業は、私達と同年輩の方々対象のOG観察会が主体ですが、これは、NPO法人から公益法人への移行を目指している当大学にとって一層の公益事業を求められることにも沿っています。また、自然と文化科の活動方針の1つでもあります、“学んだ知識を生かして社会に役立つシニアになること”にも合致するものであります。

ところで、専任幹事を引受けるにあたり一番の気苦労は‘観察リーダーの募集’と聞いていたのですが、今年度は一度の募集で快く協力頂き、取越し苦労だったこと、科員の皆さんに感謝しています。

この主体事業であるOG観察会で私達と同年輩の方々に、『ほんとー！』とか『そーだったの！』とか云わせ、自然に興味を持たせる観察会にするのは、リーダーが一つの事を話すのに何倍もの関連事を知って出来る事であり、それを皆さんはやり遂げています。例えば、イ草の説明の為に、一番長い植物名前 → アマモを主食としているジュゴンの現状 → 《エサの海草藻場の激減》 → 名護市の抱えている開発に伴う公害や米軍基地建設問題までリーダーの持ち資料にありました。また、一ロメモで確認出来ます『参加して良かった』とか『面白かった』、『感謝しています』などの声はボランティア事業に携わる私達には最高の報酬で、準備などの苦労が吹飛びます。

ただ、脱水症の危険性が高い7月末から9月中旬は実施を控えたため、2ヶ月余りの期間に5回のOG観察会と万博ゴミゼロウォーク、箕面の山の大掃除と計画したので、後期の事業が立込みしんどい結果となりました。来年度は、年度内事業の均一化を図るために、残留会員で4月よりのOG観察会の開催準備をして開催期間を広くする、この件はOGサイドからも歓迎の内諾を得ている事なので是非実現したいものです。

キクザキリュウキンカ（夏籠り?）

調査委員会 大庭 健

H25 年度調査委員会武田尾草本調査は 4 月 15 日から 11 月 14 日の間、合計 10 回、延べ 222 名の参加者により、総合計 292 種(54 科)を観察・記録し、無事終了しました。

自然と人間の攪乱の中で、様々な草花が、それぞれの生き方で生きている姿を観察、勉強でき、とても楽しく、有意義な 1 年でした。(自己満足！)

広報委員会からこの原稿の依頼を受けた時のテーマが「冬籠り」だったのですが、いいネタがなく、この『キクザキリュウキンカ』が「夏籠り」(夏眠性)する植物だったのを思い出し、「籠り」つながりで、17 号でも少し触れましたが(※)、再度書くことにします。

『キクザキリュウキンカ』一年の記録 4 月 15 日



最初の調査日に花を観察したのですが、委員の皆さんも何という種か同定できず、いろいろ調べていただいた結果、やっと欧州原産のキンポウゲ科の園芸種が逸失帰化

(1992 年淀川河川敷で初めて記録された)したものとなりました。

4 月 29 日

既に花の勢いがなくなってきました。

(花期は 2 月から 4 月だそうです)



5 月 16 日

多くの株が盗掘されてなくなっ

ていたがひとつだけ実を発見。

5 月 31 日

他の草たちが葉を伸ばしだす中、葉はほとんど枯れ、以降地上部は姿を消してしま



11 月 14 日

新芽を発見！さらに周りを見ると塊根が掘り返されていた。どうも猪がこの塊根を目あてに(?)掘り返したようだ。ただあまりおいしいわけではないのか、食べつくしてはいなかった。

キクザキリュウキンカは他の草花が競い合っ

て葉を茂らす夏に枯れ、地中に根茎を残して「夏籠り」(夏眠)に入り、冬に葉を伸ばし太陽を独り占めし、春には一番に花を咲かせる

そうです。他との競争を避けて生き残る戦略のよう

です。

- この武田尾にどのようにしてやって来たのか？
- 来年も人や猪、台風に負けず花を咲かせてくれるのだろうか？
- 100 年後には、今のセイタカアワダチソウ（明治時代観賞用園芸種として日本にやってきた）の様に日本にすっかり馴染んでいる？

これからも「冬籠り」せず、様々な植物の生き方を学んでいきたいと思う今日この頃です。

(※キクザキリュウキンカの別名ヒメリュウキンカ)

星のふる里

1 班 高原 富佐子

私の故郷には、狐狸庵先生として有名な作家遠藤周作の「血の故郷」という石碑が立っています。岡山県美星町は遠藤周作の母親の出身地なのです。

彼は歴史小説「反逆」の中で、信長に謀反を起こす摂津茨木城主荒木村重の侍臣として竹井藤蔵（架空の人物）を登場させています。藤蔵の出身地は備中の国小笹丸城です。ちなみに竹井姓は彼の母親の旧姓で今も美星町に残っている名前です。小笹丸城跡は美星町にあって現在も当時の面影を残しています。建物は消滅していますが、本丸、二の丸、三の丸跡や井戸跡もあります。私も数年前に訪れましたが、小笹丸城跡に立つと、時代の流れから取り残されたような手付かずの自然を眺めることができます。土地の人も人情味豊かで懐かしい気持ちになります。小笹丸城跡から少し離れたところに中世の城と町並みが「中世夢が原」として再現されています。

美星町は中世の歴史が残っているとともに、星空が美しい町です。もともと吉備高原という標高の高い所にあり空気もきれいで、夜空も美しい所です。

1989年に美しい星空を守るため、そして地球環境を守るために「光害防止条例」（夜間照明は水平以下にするなど）が制定されました。夜は家から1歩出ると周りは真っ暗、漆黒の闇です。昔の田舎は何処もそうでしたが、今は国内の隅々までコンビニができ、夜も明るくなってきました。でも美星町の夜は今でもほんとに真っ暗です。そして澄みきった美しい星空を眺めることができます。

1993年に国内最大級の直径101cmの反射望遠鏡を備えた美星天文台が設置されてからは、全国の天体ファンが訪れるようになりました。今年も12月上旬に大物のアイソン彗星が見られるということですから多くの人でにぎわうことでしょう。

中世の歴史が残り、美しい星をながめられる美星町に機会があれば、みなさんもぜひお出かけください。

今年も冬をむかえて

2 班 堂瀬 広幸

今頃になると、やわらかい陽ざしを浴びながら落ち葉を踏んで歩く冬の雑木林は気持ちがいい。花も葉もない静寂な中を見ていると枯れた様な枝に小さな芽が並んで春の兆しを待っているような気配を感じる。はて？この冬芽は？記憶は去年の冬にも同じ感覚で残像している。え～と何だ・・・この植物観察に縁をもらってもう4年目の冬になる、その時々冬芽を観ながら解説をいただき確認し、頭部に入れた筈が・・・嗚呼！4年目の冬を嘆き悲しむ事になるか！？

青春、朱夏、白秋、玄冬とその表現にふさわしく、植物も季節に応じて花を咲かせ、実を結び、必ずと言ってよいほど我々の期待を裏切ることなく、楽しませてくれる。植物を愛人と言って憚らぬ偉人の気持ちが少しは分かるような気がする。さて、その冬の記憶の中で、この冬の寒さがあればこそ、サクラの花芽が開花すると聞いて正直に驚いた！冬の訪れの役割はこんなにも大きく、自然の摂理と云うべきか！

今年も冬をむかえて～来年の今頃に同じ思いをしないよう、一年を通じて観察眼を磨き努力すると自身に誓うが、なにせ曖昧な性分のため、一抹の不安が過る。冬の記憶の中でもうひとつ、冬の季語に“帰り花”と言う言葉がある。初夏に咲く花である筈のモチツツジの花を[ささやま森の公園で]観た。隣人が「良く言えば帰る花、悪く言えば狂い咲き」と言ったが、なかなか言い得て妙であった。自然も時には悪戯をするらしい、巷にもこの歌を唄った歌手がいるみたい・・・そろそろめに・・・

冬芽観察について、「三大美芽」と言う三種の冬芽が殊の外美しいと言われている。「トチノキ」、「ネコヤナギ」、「コブシ」、・・・リョウブ等も美しいと思うのだが、誰が云い始めたか知らないけれど、定番はこの三種らしい！？この冬、私自身の美芽を選ぶぐらいの冬芽観察を実感したいと思っているが、今年も冬をむかえて、悩むこと多し！年年歳歳花相似たり歳歳年年人同じからず。あと僅かで一年が過ぎようとしております。

来年年も実り多い年になりますように・・・

皆様よいお年をお迎えください。

熊野古道

3班 歩 好子

今年も原稿書きの順番が回ってきました。何書こう、どうしようと考えた時にやっぱり歩くことを書くことにしました。

子供の頃からテクテク歩くのが好きで、イヌの散歩などは、あまりの長さにイヌが嫌がって帰ろうと紐を引っ張った程でした。山歩き・街歩き・ジムでのマシン歩き、どれも好きですが、10年ほど前に書店で「熊野古道を歩く」と云う本を買ひ、読んでみると面白い。古道歩きも楽しいだろうと思い、先ず熊野第一王子のある大阪天満橋界隈を歩いてみました。車や人が多い天満橋でやっと捜し当てた時は嬉しかったものです。

熊野古道は2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されましたが、大阪の古道は登録されず、大阪では熊野街道と云う石碑や銅板が建てられています。古道途中には九十九王子と云われた神社があり、12、3世紀の頃に皇族達の熊野詣の先達をつとめた修験者によって建てられた神社で、今は殆ど石碑のみになっています。明治の終わりに、神社合祀令によって他の神社に遷座させられたり、廃れて場所さえ分からない、多分このあたりだろうと云う石碑もありました。蟻の熊野詣と云われて、中世から皇族・貴族・庶民に至るまでが歩いた道、天満橋～熊野三山へ中辺路を繋げることにしました。家事や仕事の合間に、おもには日の長い夏に、暑い！暑い！と言いながら歩きました、歩き続けています。

紀伊田辺までは順調に歩けたのですが、そこから先が大変です。中辺路を歩けば歩くほど遠くなり、JR2時間＋バス2時間＋待ち時間×往復＝チョー大変なのです。しかし古の人達が同じ道をどういう思いで歩いたのか、何を感じたのか、少し分かるような気がしました。大自然に対する信仰や来世への救済を願い、京都から熊野まで片道300キロ以上の道を歩く。本当にすごい事で、「昔の人は偉かった」です。

今は1番窪津王子から歩き始めて92番発心門王子まで歩きました。あと7キロほどで熊野本宮大社です。熊野速玉神社、熊野那智の熊野三山まであと少し、ゆっくりと楽しみながら歩きたいと思っています。

富士山大噴火の予想を探る

4班 坪井 都子

せっかく富士山が世界文化遺産に登録されたというのに「噴火予想」とはまた水を差す言葉、だからこそ学者さんの予想理論を現場で検証(?)する旅に今年11月中旬、所属サークルで行ってきました。言いながら、富士山の美しさと紅葉を堪能することが優先していたことは否めません。

【検証その1】富士山は日本最大の活火山

富士山はここ10万年という短い期間で現在の大きさにまで急成長した若い火山である。富士山がある場所はプレートが3枚も重なり合っているという世界でも珍しい地域。西暦864年富士山の北西山麓で起きた「貞観噴火」、青木ヶ原はその時の溶岩原である。1707年富士山の南東斜面で



「宝永噴火」が起きた。噴火は16日間続き、広範囲に火山礫や火山灰を降らせ、江戸も5cmの火山灰で覆われたという。宝永噴火の傷跡は5合目付近の「宝永山」として残る。これは富士山のたった300年前の噴火という出来事なのである。

【検証その2】伊豆・小笠原諸島で連続する噴火

1983年三宅島噴火、1986年伊豆大島三原山噴火、1989年伊東市沖合の海底噴火、2000年三宅島近海でのM6.5の地震の後、三宅島噴火。日本列島と伊豆小笠原諸島弧はぶつかり合い、攻めぎあう関係の中で、南東から北西へ噴火が連続している。今日11/22の報道で3日前から小笠原諸島の西ノ島の南東500mで噴火中・・・。

【検証その3】関連する地震と噴火

「地震から噴火までの時間」と「震央から火山までの距離」とは相関関係にある。864年貞観噴火の5年後、貞観地震（東日本大震災と同じ規模）は起きた。三宅島で大噴火した2000年から富士山の低周波地震が活発化している。その上、東日本大震災直後から通常地震活動までが劇的に増加していることは否定しがたい事実なのだ。この美しい世界の「富士山」が美しいままでありますようにと祈ります。

「今の日本人にがっかり」

2班 高井 茂光

あの震災から一年を迎えようとしていた頃、日本国籍を取得したばかりのドナルド・キーン氏がある時述べていた言葉です。「震災直後は東京から明かりが消え、力を合わせて東北の人を助けっていると感じたが、今は街が明るく、必要のない看板もたくさんある。自らを犠牲にするということを考えていない。東京だけではない。もう忘れていてののではないか。まだやるべきことはいっぱいある」と。

私はこの言葉が妙に心に引っかかっています。私自身 震災直後ですらボランティアに参加するでもなく わずかな義援金でお茶を濁しました。

この夏東北を訪ねる機会があり、ささやかでも復興支援になればと参加しました。仙台～東松島～南三陸～気仙沼～陸前高田～一関と、震災の後 耳にたこができるほど聞いた場所を巡ってきました。

南三陸では 職員42名が犠牲になり遠藤未希さんが最後まで住民に避難を呼びかけて帰らぬ人となった、あの防災対策庁舎の無残な姿を間近に見、昼食のため仮設の復興市場にも立ち寄りました。人影は少なく、市場を訪れるのは僅かな近隣の住人と時に我々のようなバスや車で立ち寄る程度の人と推察され寂しい限りでした。

気仙沼では 内陸はるかに打ち上げられた第十八共徳丸の船底近くまで行って巨大な船を下からまじまじと眺め、あらためて自然の猛威を実感しました。 陸前高田では 七万本ともいわれる松の中唯一津波から生還した「奇跡の1本松」として保存作業が完了したばかりのモニュメントの松を見ってきました。海岸に崩れて残るユースホステルに守られて被災を免れたのではないかと思います。あのユースホステルで何人の人が犠牲になったのであろうかと思うと暗澹たる気持ちになりました。

この旅 何処へ行っても、どの光景を見ても不思議なくらい冷静でした。なぜだろうか？悲惨な光景を繰り返しテレビで放映されて慣れてしまったせいか、あるいは私にとってはすでに遠い過去のことになってしまったのか。だとしたら私自身がドナルド・キーン氏が、がっかりした日本人そのものではないか、そんな思いがしました。この震災で犠牲になった何万という人々の思いと想像を絶するつらく悲しい経験をして生き残った人々 原発の後遺症でいまだ故郷に帰れない多くの人々 それらの人々と どう向き合っていくのか 我々日本人は、大きな課題を突き付けられていることだけは間違いなさそうです。

岡山のお雑煮

2班 岡田 純子

大阪に住むことになって初めてのお正月、お雑煮にびっくり！白味噌仕立てのまったりとした上品なだし汁、小さな大根の姿をした野菜が載り、子餅が2個、これがお雑煮と驚きました。若かった私には大阪の文化を感じた大きな出来事でした。カルチャーショックというのはこんな事ではないでしょうか。次世代は新潟生まれのお嫁さん、角餅に具沢山のお雑煮に又ビックリです

岡山が故郷の坪井さんと私はお雑煮のレシピを話しあいました。彼女は岡山の南部瀬戸内に近く、なんと言っても鰯（イリ）が一番。鰯はお正月やお祝い事には必ず一匹丸ごと登場するよね。と二人で懐かしい故郷談議。下の写真のようにおすましに丸もち。鰯の切り身がお椀の中にはどっしりと陣取り、彩りにかまぼこ、お湯を通したホウレンソウ、ハマグリなどを載せてカツオ節をかけ、するめで取った熱々の醤油ベースのだし汁をかけます。

あっさりとした澄ましに鰯の脂の甘みが染み出してつついとお餅を食べ過ぎてしまいます。

材料 丸餅 塩ぶり 蛤 人参 ほうれん草
牛蒡 かまぼこ

だし汁 昆布 するめ 鰹節 しょう油

丸餅は鍋に餅を入れ弱火で柔らかく煮る。

別鍋に昆布するめを入れてだし汁をとり、人参、ごぼう、鰯、蛤、を入れ醤油で味を調える。火が通ったら大皿に取り上げる。

お椀にお餅を入れ大皿より盛り付け、熱いおすましをかける。

お正月には丸い物、出世魚の鰯、蛤を使います。岡山2人組みの合作です。



(写真は坪井さんの提供；ブログより)

母と私と大阪風そうじ

八木橋 佐知子

私が子供のころ、お正月は「特別の日」だった。前日からよそ行きの服が用意され、元日の朝は家族揃って「おめでとうございます」と挨拶。そして、いただくのがお雑煮だった。母は大阪生まれではなかったので、正統な大阪雑煮ではないと思うけれど。

カツオと昆布で出しを取り鶏肉、雑煮大根と金時人参の輪切り、そして丸い餅、白みそ仕立てで必ず三つ葉が浮いていた。いつもはしまい込んである朱塗りのお椀の中はすべて丸いものが入り「今年もまる〜くいきますように」との願いが込められた。

母は98歳で天寿を全うしたが、95歳くらいまでこのお雑煮を作ってくれた。今は私が作ることにしたが、味も形も母が作っていたその時のままであることに、この原稿を書いていて改めて気づいた。

東北のお雑煮

高原 富佐子

夫の母は仙台の出身です。結婚後はじめてのお正月のお雑煮は角餅を網で焼き、すまし汁の中に入れてその上に人参、大根、ほうれんそう、小魚をのせるものでした。岡山生まれの私は丸もちをゆでていたので、まるでサザエさんの漫画で見たような光景（お正月に角餅を網で焼き黒こげにした）に新鮮な気持ちになりました。

11月中旬にシニア事業部主催の「気仙沼・南三陸をめぐる旅」に参加しました。ちょうどいい機会ですので、宿泊した宿の人にその土地のお雑煮について聞いてみました。

気仙沼のお雑煮：角餅を焼く。醤油のすまし汁。具材は引き菜（人参、大根など）、青菜（ねぎ、水菜など）、鶏肉。

南三陸町のお雑煮：角餅を焼く。煮干しの出汁で醤油のすまし汁。具材は人参、大根、ゴボウ、小魚、アワビなど海のをふんだんに使う。



お雑煮は地方によって様々ですが、私の聞いた範囲では「おせち料理」はどこの方でもほぼ同じ（標準）でした。

宮城県 河北新報より拝借(広報)

2013冬俳句

山上 恵子

湯豆腐の味求め来て京の街
拾ひ来し三粒初物栗御飯
神留守にお礼参りの人の波
暮れ早し隣に歩く人は誰
日向ぼこ終へし我が家の猫帰る

谷坂 修二

静けさや遠雷かすか嵐前
明日の雨降るか降らぬかハイキング
チックチック秒針進む夜長かな
ドングリが自然工作背い比べ
赤々とガマズミの実酒を染め

池田炭

レジ長し本日ポイント5倍デー
掃き掃除一陣の風でやり直し
粗大ゴミ他家の出物は使へそう
休肝日これも侘しき休刊日

竹谷 律一

間引き菜のたびごと育ついとほしや
赤大根緑葉拵先争ひ
里芋や茎葉にそぐはぬ芋をかし
たかのつめかぐはしき香の師走径
こしあぶら軍手忘れし巨人を想ふ

○「私の玉手箱」は紙面の都合でお休みです。

次号予告；野生のラン科植物・あれこれ
（奎三文作）

○自由題 次号予告；「草抜き考(2)」(大村沙紀)

自然と文化だより

皆さんのご協力により19号が発行出来ました。次号をお楽しみに！（広報委員会）